

2015年度活動報告

<事業の概要>

2015年度は、2017年度からの本格運用の準備期間として位置付け、以下のとおり各種準備に着手した。

時間を確保

～学年暦の見直し～

学びとなる学外活動にはまとまった時間が必要です。学年暦を工夫し、授業を休まずに学外で学べる期間を、夏と春それぞれ約2ヶ月確保します。

2015年度実績

現在のセメスター制をクォーター制に変更することを決定し、第2ターム+夏期休暇（6月中旬～8月末）を夏の学外学修奨励期間（＝ギャップターム）とするための学内調整を進めた。

2016年度以降の計画

2016 2017年度からの実施に向けた詳細の検討・決定

2017 運用開始

経験を学びに

～カリキュラム改善～

単に経験して終わりではなく、学習目標の設定、事前学習、事後の振り返り、カリキュラムとの連携を含め、学外活動を単位認定できる学修活動に昇華させます

2015年度実績

既存の科目ではカバーできない学外学修活動を単位認定するための科目（「インデペンデントスタディ」）の新設手続きを行った。

2016年度以降の計画

2016 インデペンデントスタディ試験運用（卒業単位に含めない科目として運用）

2017 本格運用

一人一人をサポート

～学外学修センター設置～

自分の興味関心や自分の将来につながる自発的な学外活動は学生ごとに異なります。学外学修センターを作り、一人一人の学外活動に寄り添いながら、手厚いサポートを行い、学びにつなげます。

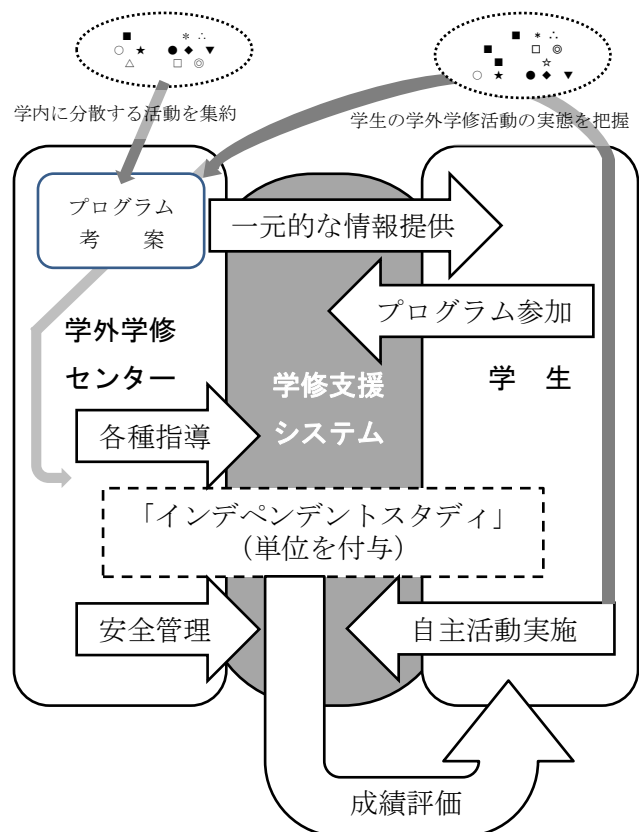
2015年度実績

学外学修センターを設置
学修支援システムの設計を開始
学内に分散する学外学修活動の集約

2016年度以降の計画

2016 学生の学外学修活動状況の把握
提供プログラムの考案・試験運用
自主的な学外学修活動支援の試験運用
学修支援システムの試験運用

2017 運用開始



<取り組みに対する内部評価>

実施日：2016年3月31日（木）

実施方法：事業実施報告書を事前に配付し、同資料に基づく質疑・応答

評価者：学長補佐、学生委員長、教務委員長、国際センター長

評価概要：全体的に、余裕を持ったスケジュールで計画通りに進行している点はおおむね評価された。事業の進め方についても、本学のリソースを集約し組織的に活用していくという、これまでの教育方針を意識的に継承している点は高評価を得た。学外学修プログラムを拡充していくために必要な対象に対して広報活動が注力されていることを評価する一方、学内広報や社会全体への発信が後手に回っている点は改善すべき点として指摘があった。中でも、2017年度より大幅に見直される学事暦が大枠のみの提示となっており、具体的な提示がないことに関する指摘が目立った。その他、事業の目的が総花的になっているため何のための取り組みかをしっかりと定めないと軸がぼやけかねないこと、事業の推進あたっては慎重に決定しないと学生・教員・職員への過重な負担が生じかねないことが指摘された。

<取り組みに対する外部評価>

実施日：2016年3月31日（木）

実施方法：事業実施報告書を事前に配付し、同資料に基づく質疑・応答

評価者：他のAPテーマⅣ採択校

評価概要：取組内容について、①学外学修活動に関するワンストップサービスを設置し全学的に永続性のある内容である点、②個別のプログラム開発ではなく、個人ベースの主体的な活動を支援の中心に据え、全学的に学外学修を推進していこうという取り組みである点、以上2点に関する評価を得た。2015年度の活動については、事業を推進するうえで重要なポイントと言える「学事暦の見直し」に関して、学外学修推進のためには理想的ともいえる方向性で学内合意が取れた点について、軒並み高評価を得た。

一方、APテーマⅣで求められている「入学直後の学外学修活動」という点が弱いこと、2017年度の運用開始に向けて取り組みを具体化させていくにあたっての体制管理をもう少し検討すべきとの指摘が寄せられた。また、内部評価で受けた指摘と同様に、学生や社会全体への情報発信が後手に回っている点は改善すべき点として指摘があった。

また、①新設科目「インデペンデントスタディ」において、学生それぞれに異なる学外学修活動の評価する際の基準の在り方、②見直した学事暦に対する具体的な調整プロセスについて、その成果は Good Practice になるであろうと本事業への期待が寄せられた。

これら評価の結果をふまえ、2016年度は多面的な広報活動を強化することとし、広報部会を新たに設置し、全学的な体制で学内外への広報に注力していくこととした。学内広報を強化することで、全学的な調整をスムーズに進行しうる、事業運用のための体制強化の方策実現をめざす。